# 近江の条里と古道

－ 生い立ちから考古学・歴史地理学への道をかたる－

## 第１部　考古学・歴史地理学への道

### １，はじめに

**生い立ち－ 恋愛考古学への出発点**

出生　1944.1.31　広島県豊田郡忠海町に高橋恕一・一子の四男として生まれる

７人兄弟の６番目、幼名「よんちゃん」、ままごと・ぬりえが大好き

→地図の色塗

小学　1950　広島県芦品郡国府村国府小学校入学（備後国府にちなむ地名）

魚取り、昆虫観察（アリ、クモなど)、雲・星の観察、マンガ大好き

探検記、歴史物語などの本を読みあさる。ヘディンのタクラカマン砂漠探検記を読んでシルクロードにあこがれる。

小学校６年、中学校１年で府中高校地歴部の合宿に参加→考古少年に

中学　1956　広島県府中市立第一中学校入学　登山部に入る、キャンプ生活好きに

中学２年の遠足で瓦が出土する「最明寺跡」を見学、奈良時代の瓦を採集。

この遺跡がのちに、品治（ほむち）駅家と判明する。→駅路の研究へ

高校　1959　広島県立府中高等学校入学　地歴部と化学部に入る

広島県の考古学の草分けの豊元国のもとに、広島県の遺跡を踏査、文化祭に派手な展示で注目される。考古学の道へ進みたいと思うと共に、理系への進学の希望もあって迷う。

## ２，大学・就職− 考古学・歴史地理学へのみち

大学受験　1962　１期校　京都大学文学部、２期校　名古屋工業大学土木工学科受験で人生の岐路を賭ける→京都大学文学部に合格　恩師は考古学でなく地理へ行くように勧める→遺物考古学でなく遺跡考古学へ

大学　文学部史学科地理学専攻、歴史地理をやる。藤岡謙二郎に師事、また考古学研究室に行くことの方が多く小林行雄に師事。

中国考古学旧石器時代、殷周時代の青銅器、シルクロードの考古学、中南米の考古学、日本の律令時代に興味　当時の歴史地理学では、条里や条坊、国府研究が盛ん、卒業論文　ふるさとの備後の国府や最明寺跡を思い、播磨国で駅家研究、山陽道の瓦葺き駅家追究→直線幅広の山陽道→ライフワークに

京都府文化財保護課　1967　発掘調査を担当する技師となる。　12 年間

考古学を職業にすることは至難。当時考古学技師を採用するときは、京大の主任教授が推薦。考古学専攻卒業生３人

15 年間京都府下各地の各種の遺跡の調査を担当。思い出の遺跡（人生の画期になった遺跡）

1967　大成古墳群− 最初に担当した遺跡、遺跡調査の基礎の基礎

1973　正道官衙遺跡− 奈良時代の郡衙（ぐんが）→史跡指定で保存へ

1975　長岡京跡− 条坊遺構の発見、木簡の発掘、平城京型の条坊→大規模調査への転機

1979　今里車塚古墳− 長岡京の造営で破壊された古墳

「木の埴輪」の認識→分かり易い図

京都府立山城郷土資料館　1982　新設の資料館の資料課長　12 年間

学術的な成果を分かり易く展示・公開する→復原画、模型、子供向け歴史教室

自身の充電期間→考古学だけでなく美術史、建築史、歴史（中世・近世）、民俗学などに幅を広げる。→多数の論文を書く、木の埴輪、山陽道、城館、大坂城と石材

（財）京都府埋蔵文化財センター　1994　京都府の発掘調査の最前線　１年間

### ３，滋賀県立大学へ－ 近江の歴史地理学研究へ傾倒

考古学、人文地理、博物館学を担当→地理学・博物館学にウェイト

古代の歴史地理研究の３本柱（条里・条坊研究、国府・地方官衙研究、古道研究）

近江ではいずれも先進的に進められた→今更研究の余地はないのでは？

条里制研究は過去のもの、時代遅れのものとなっていた。しかも、多くの条里遺構が消滅していた。

条里研究が下火になってからの挑戦、果たして成果はあるか？

基礎資料の収集から始める→条里研究と古道研究と史料調査で活路が見えてくる。

今までの研究は条里復原が研究の主眼？→復原された条里から何がみえてくるか？

## 第２部　近江の条里と古道

### １，条里とは

土地区画法　耕地を６町（約 654m）間隔で縦横に区切り、さらに１町（約 109m）間隔で区切った方形区画（面積は１町）を坪とよぶ、それをさらに 10 等分した土地の面積を１段（反）とする。

土地表示法　６町間隔の列を条、６町四方の方形区画を里と呼び、その中を 36 の方形区画の坪に数詞をふり、〇国〇郡〇条〇里〇坪で土地の所在地を正確に表示する。

### ２，近江の条里

琵琶湖周辺の平野に条里地割りが良好に残る→条里研究の先進地帯

大正末から昭和初年に郡志編纂で近江条里研究は大成

戦後圃場整備の進展→条里痕跡の消滅の危機感→歴史地理学的研究さらに進展

圃場整備にともなう発掘調査→条里施行年代の検討

## ３，甲賀郡条里の復原研究から

大和国弘福寺領蔵部荘の史料

坪付け史料の図化

甲賀郡条里の条呼称の復原

里呼称の復原

地名の検討、四至「東谷　南溝　西川　北佐遅谷竟」、「寺庄」

## ４，甲賀郡条里を復原の成果

〇古道との関係　栗太・野洲郡統一条里と直交→東山道に直交する倉歴道を基準線として甲賀郡条里施行、

〇弘福寺領蔵部荘の現地比定→近江の弘福寺領４件→２種に分類、草創期荘園と墾田地系荘園←従来は一括して初期荘園

〇草創期荘園と墾田地系荘園の立地分析→

古い開発＝草創期荘園、河川灌漑、条里地割り有り、統一条里地区

荒れ地の開発＝墾田地系荘園、溜池灌漑、条里地割り無し、周辺条里

〇条里の施行年代

## ５，近江条里研究の展望

条里制研究→人類の土地利用の歴史が込められている、それが現代の道路・水路・田畑の土地区画にも生きている、現代の都市計画・土地利用計画に生かされる。

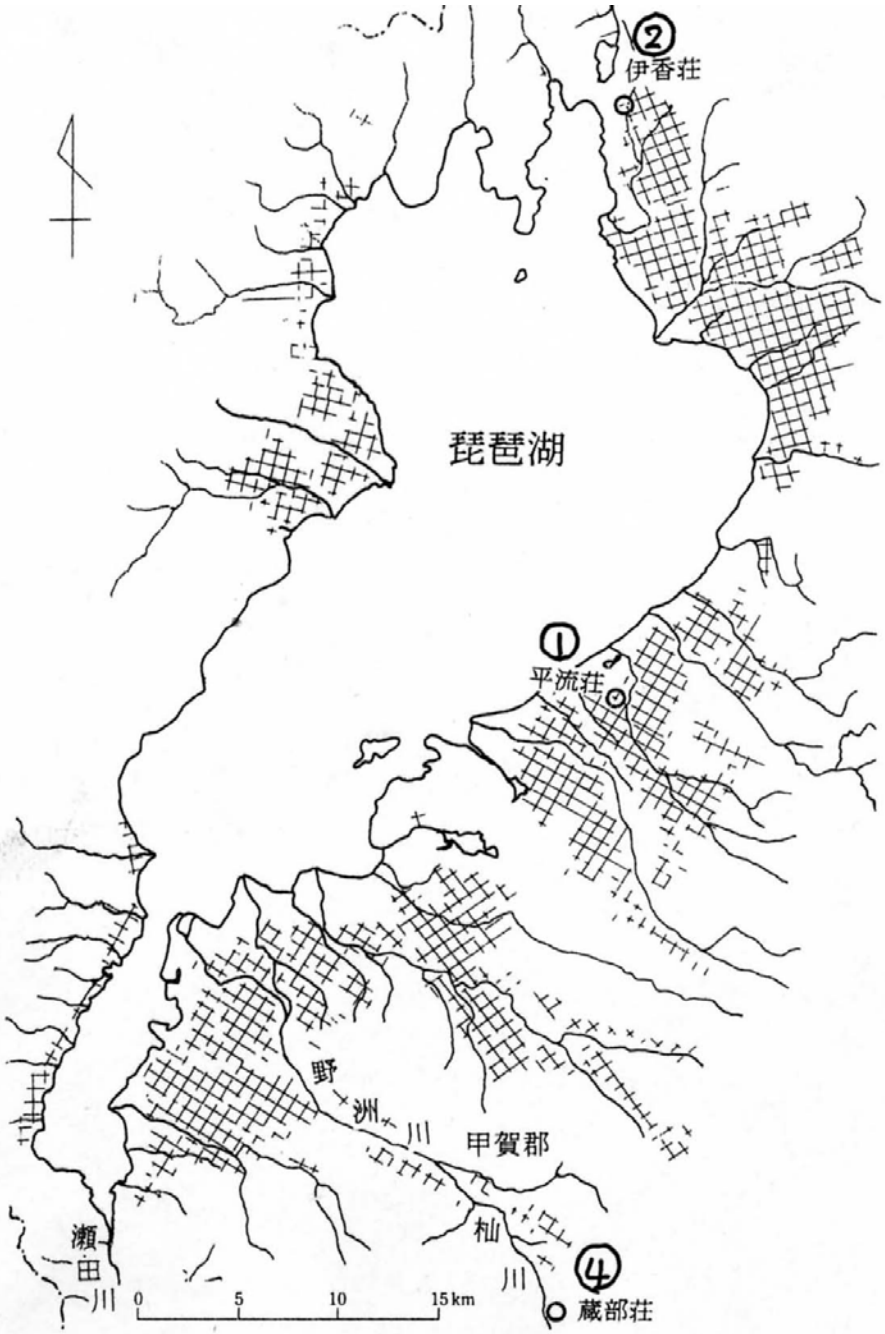
土地開発の歴史の探究→先人の知恵と工夫の歴史

基礎資料の集積→地名、地割、史料の３セット→（奈良県や福井県の条里基本資料集）

これができれば、研究の無限の可能性が広がる

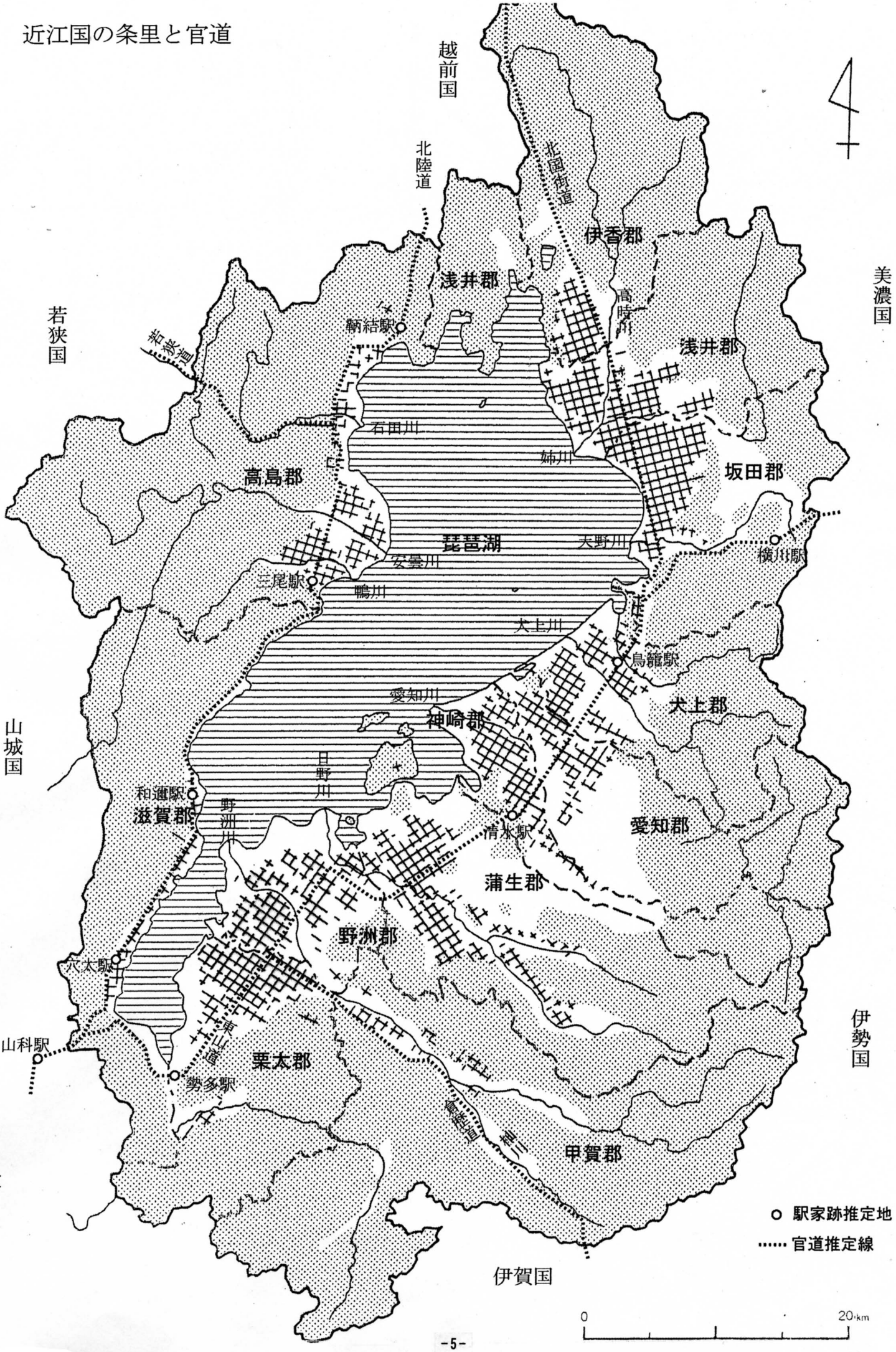
**表1**　近江国の弘福寺領荘園の比較

| | 所在地 | 荘園名 | 立荘時期 | 施入者 | 面積（奈良） | 面積（平安） | 増加率(%) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 愛智郡（依智郡） | 平流荘 | 大宝以前 | 斉明天皇 | 11町1段036歩（和銅2年） | 11町4段298歩（延久2年） | 103.35 | 草創期荘園 |
| ② | 伊香郡 | 伊香荘 | 大宝以前 | 斉明天皇 | 10町2段228歩（和銅2年） | 10町2段236歩（延久2年） | 100.03 | 草創期荘園 |
| ③ | 甲賀郡 | 水主荘 | 宝亀6年（775） | 水主内親王 | ? | ? | ? | 初期荘園 |
| ④ | 甲賀郡 | 蔵部荘 | 天平勝宝3年(751) | 修多羅衆 | 21町0段000歩（勝宝3年） | 31町9段090歩（延久2年） | 152.02 | 初期荘園 |

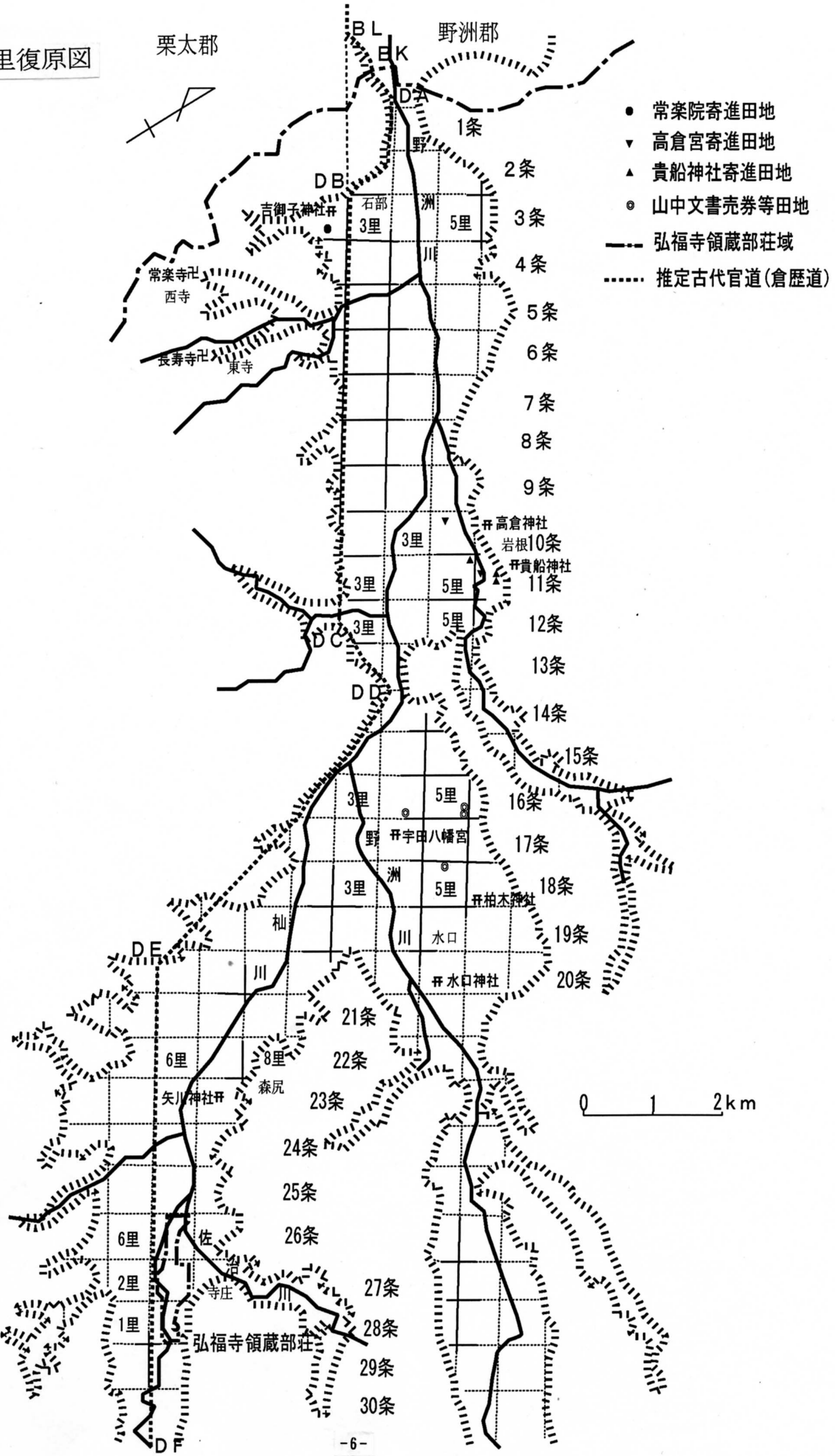



近江国の条里地割分布と弘福寺領荘園の位置図

近江国の条里と官道


越前国
北陸道
北国街道
伊香郡
浅井郡
高時川
浅井郡
美濃国
若狭国
若狭道
鞆結駅
石田川
姉川
坂田郡
高島郡
琵琶湖
天野川
横川駅
安曇川
三尾駅
鴨川
大上川
鳥籠駅
愛知川
犬上郡
神崎郡
山城国
日野川
和邇駅
滋賀郡
野洲川
清水駅
愛知郡
蒲生郡
野洲郡
六大駅
山科駅
東山道
栗太郡
勢多駅
東海道
甲賀郡
伊勢国
伊賀国
駅家跡推定地
官道推定線
0
20km

# 甲賀郡条里復原図


栗太郡
野洲郡
BL
BK
DA
DB
DC
DD
DE
DF
1条
2条
3条
4条
5条
6条
7条
8条
9条
10条
11条
12条
13条
14条
15条
16条
17条
18条
19条
20条
21条
22条
23条
24条
25条
26条
27条
28条
29条
30条
3里
5里
6里
8里
2里
1里
野洲川
石部
吉御子神社
常楽寺
西寺
長寿寺
東寺
高倉神社
岩根
貴船神社
宇田八幡宮
柏木神社
水口
水口神社
杣川
森尻
矢川神社
佐
寺庄
沼川
弘福寺領蔵部荘
常楽院寄進田地
高倉宮寄進田地
貴船神社寄進田地
山中文書売券等田地
弘福寺領蔵部荘域
推定古代官道(倉歴道)
0
1
2km

## 史1 ○弘福寺田畠流記帳 ○四滿寺文書 （寧楽遺文四）

弘福寺川原

田壹伯伍拾捌町肆段壹伯貳拾壹歩

陸田肆拾玖町漆段參歩

大倭國廣瀬郡大豆村田貳拾町玖段貳拾壹歩 山邊郡石上村田貳拾捌町肆段壹伯肆拾陸歩

近江國依智郡田壹拾壹町壹段參拾陸歩 伊香郡田壹拾町貳段貳伯貳拾捌歩 ↑①↑②

美濃國多藝郡田捌町 味蜂間郡田壹拾貳町

讃岐國山田郡田貳拾町

和銅二年歳次己酉十月廿五日正七位下守民部大錄兼行陰陽暦博士山口伊美吉田主

（七〇九）

## 史2 ○近江國藏部莊券 字面ニ「近江國印」アリ ○東寺文書證

甲可郡司解 申賣買墾田并野地立券事

合墾田貳拾壹町 野地參町 東谷 南溝 西川 北佐遅谷竟 在藏部鄕④者

右、左京五條三坊戸主從五位上阿倍朝臣嶋麻呂

墾田者、

以前、得嶋麻呂申狀偽、以己墾田并野地、賣與大倭國高市郡弘福寺大脩多羅衆已訖、所得價錢貳佰參拾貫者、仍勒賣買兩人所連署名、依式立券如件、仍具錄事狀、附使大初位上鷹養君安麻呂申上、以解、

賣人從五位上阿倍朝臣「嶋麻呂」

買弘福寺大脩多羅衆

大鎮兼大上坐法師「蓮勝」

少鎮僧「榮猷」

上坐僧「林藏」

都維那僧「榮脩」

寺主兼大學頭僧「惠興」

少學頭僧「善勝」

天平勝寶三年（七五一）七月廿七日主帳无位川直「百嶋」

## 史3 ○一〇四四 近江國弘福寺領莊田注進 ○東寺文書證

弘福寺

①↓ 注進近江國愛智郡平流庄所領田事

二條七里卅五坪三段二百八十歩 卅六坪北五段百歩

八里四坪百卌四歩 五坪八段二百六十歩

六坪七段百廿歩 十坪五段

十一坪九段二百八十八歩 十二坪一町

十六坪九段 十七坪九段二百八十八歩

十八坪九段 廿二坪九段七十二歩

廿三坪九段二百八十歩 廿四坪五段

廿八坪五段二百十二歩 廿九坪六段卌四歩

三條十六里十三坪一段

已上拾壹町肆段貳佰玖拾捌歩

②↓ 同寺所領伊香郡伊香庄田事

十八條四里廿二坪九段二百卌歩廿三坪九段百八十歩

廿四坪五段二百六十四歩 廿八坪一町

廿九坪一町 卅坪八段三百卅八歩

卅四坪九段百卌四歩 卅五坪一町

卅六坪一町

五里五坪九段百五十歩 六坪一町

已上拾町貳段貳佰參拾陸歩

③脱カ

④↓ 同寺所領同（都賀）□部庄田事

廿六條七里十三坪七段八十歩 十四坪七段二百六十歩

十五坪七段二百六十歩 十六坪二段

、十七坪□二百歩 十八坪二段二百歩

十九坪三段二百歩 廿坪八段三百歩

廿一坪九段 廿二坪九段卌歩

廿三坪一段三百廿歩 廿五坪二段二百歩

廿六坪七段 廿七坪四段卌歩

廿一坪六段百歩

廿七條三里八坪一段八十歩 九坪六段二百六十歩

十坪九段百歩 十三坪四段

十四坪八段三百歩 十五坪四段

十六坪三段二百歩 十七坪三段百七十歩

十八坪三段八十歩 十九坪七段二百歩

廿坪八段三百歩 廿一坪一段百歩

廿二坪四段八十歩 廿三坪四段

廿四坪二段百歩 廿五坪六段百歩

廿六坪八段二百歩 廿七坪七段九十歩

廿八坪一段九十歩 廿九坪五段二百歩

卅坪三段二百歩 卅一坪三段

卅二坪四段二百卌歩 卅三坪一段三百廿歩

卅四坪五段八十歩 卅五坪五段

卅六坪二段廿歩

四里十七坪三百歩 十八坪一段八十歩

廿八條二里十三坪一段百九十歩十四坪三段百廿歩

十五坪四段二百卌歩 十六坪三段二百歩

十七坪三段八十歩 十八坪三段百八十歩

十九坪九段廿歩 廿坪九段

廿一坪八段二百歩 廿二坪一町一段

廿三坪九段二百六十歩廿四坪九段二百六十歩

廿五坪六段 廿七坪二段百歩

廿八坪八段 廿九坪五段七十歩

卅坪九段百廿歩 卅六坪一段百廿歩

已上參拾壹町玖段玖拾歩

右件領田等、甲賀郡水③主庄、寶龜六年十一月官省符、水主內親王所被施入也、藏④部庄、天平勝寶三年寺家大修多羅衆修多羅供料買得墾田野地等、所施入也、依智①伊香②兩庄、大寶以前本願佐佐名實、天皇御施入也、其本公驗等、寺家燒亡之刻、燒失已畢、仍所司等、注事由、謹言上、

延久二年三月十一日 都維那法師「覺助」

（一〇七〇） 寺主大法師「清因」

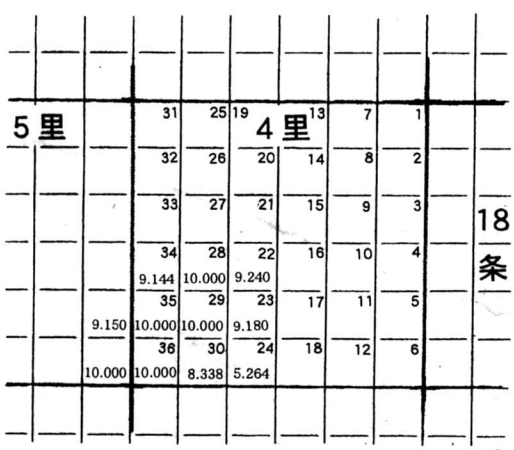
上座大法師「親助」

檢挍大法師「忠覺」

○「弘福寺印」四十五アリ。

④ 図5　蔵部荘の条里坪付図（枠内の上段のゴチ数字は坪付け番号、地名は天平宝字2年の坪付けの地名、下段の数値は延久2年の面積）

① (a) 愛智郡平流荘坪付図




② (b) 伊香郡伊香荘坪付図

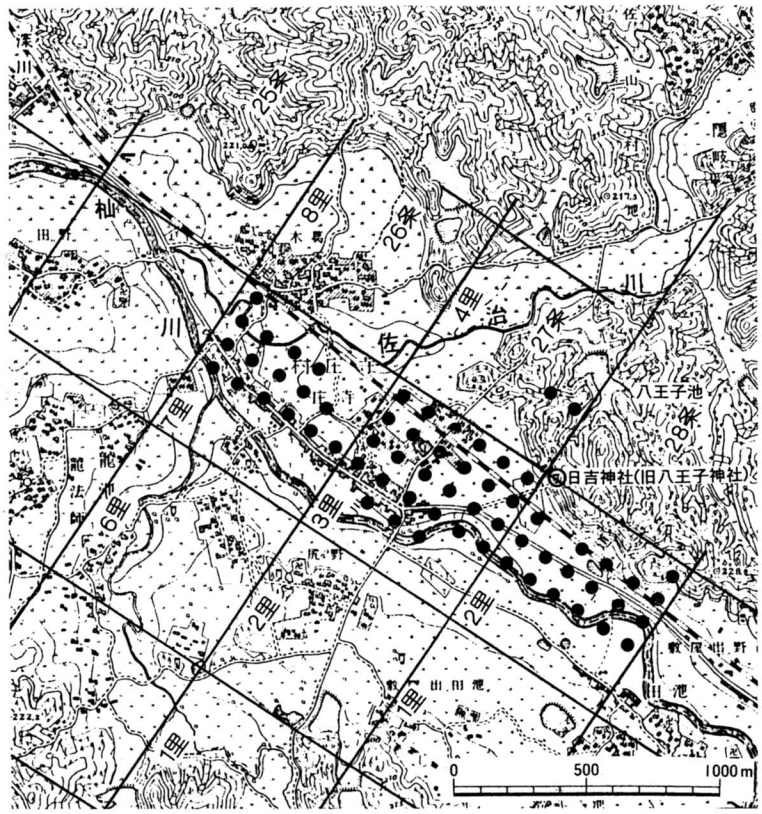
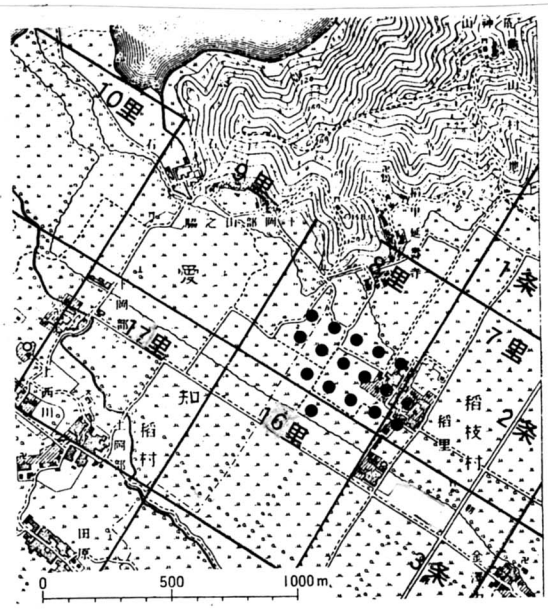
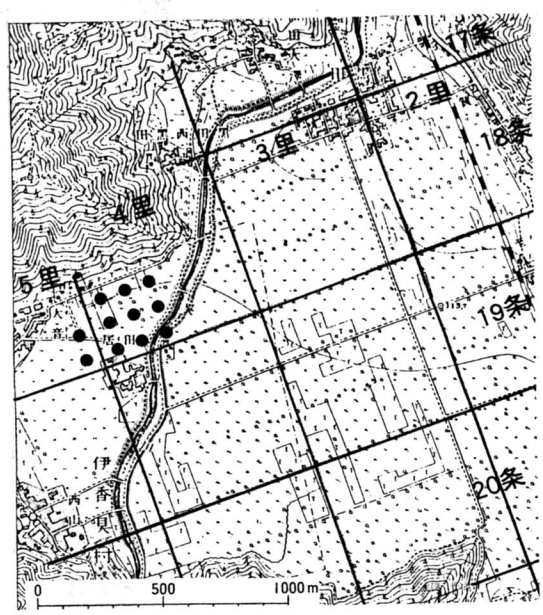



図6　蔵部荘の条里復原図（●印は，史料に坪付のある場所。明治26年測図正式2万分の1「寺庄村」）




(a) 平流荘の現地比定図（弥永貞三 1956 による）




(b) 伊香荘の現地比定図（筆者案）

市史編さん

# こぼればなし

その10

## 奈良時代の大村寺

彦根市史編集委員
高橋美久二
（滋賀県立大学助教授）

4世紀から6世紀には、当時の権力者の墓である古墳がさかんにつくられたが、7世紀になると、古墳はほとんどつくられなくなった。古墳に代わるモニュメント（記念物）として登場したのが古代寺院であった。それらは、古代豪族の権威の象徴として建立された。

滋賀県内には、このころ建立された寺院が60か所以上存在したことが、遺跡から出土する瓦によって知られている。ところが、そのほとんどは当時の寺院名もわからない。滋賀県内で奈良時代以前の寺院名が文献資料からわかるのは、崇福寺、益須寺、石山寺、甲賀寺など数か所にすぎない。

彦根市内にも、奈良時代以前の古代寺院の遺跡がある。高宮町の高宮廃寺、竹ヶ鼻町の竹ヶ鼻廃寺、上岡部町の屋中寺跡、下岡部町の下岡部廃寺、普光寺町の普光寺跡がそれで、さらに最近になって滋賀県立大学の敷地周辺にあったと推定されるようになった八坂東遺跡がある。屋中寺と普光寺は、それぞれ遺跡がある場所の地名と中世の史料などに同じ寺院名があることから、その名が想定されているが、はたして古代にまでさかのぼれる寺院名であるかはわからない。それ以外は、寺院名がわからないために、「地名プラス廃寺」の遺跡名で呼ばれている。竹ヶ鼻廃寺からは、7世紀中ごろに建立された奈良県飛鳥の山田寺の創建時の瓦によく似た瓦が出土していて、犬上郡でもっとも古く、犬上郡を代表する古代豪族によって建立された寺院と考えられるが、創建の事情はおろか寺院名も定かでない。

古代の史料によって、彦根市内の8世紀の寺院名がわかるものがある。それは、天平勝宝3（751）年の絵図「近江国覇流村墾田地図」である。この絵図は、覇流岡とよばれる岡と湖に挟まれた場所で、犬上郡と愛知郡にまたがって存在した東大寺の庄園を描いたものである。現在の位置は、荒神山の西側の曽根沼があったところに想定されている。この絵図には、東大寺領の南側が「大村寺田」と4か所にわたって記されている。この大村寺は、荒神山南麓の下岡部廃寺であろうと考えている。下岡部廃寺の中心は、下岡部の集落の東北の墓地付近であるが、昭和3年の耕地整理以前の地籍図ではこの墓地を大きく囲んで「大村」の小字が残っていた。ここに大村と呼ばれるような古代に栄えた集落があって、そのシンボル的な存在がこの寺であったろうと想像される。

広報ひこね 1996年2月1日
「奈良時代の大村寺」高橋美久二

市史編さんだより

第2号
平成9年2月15日
編集・発行
彦根市総務部
市史編さん室
彦根市大東町5番12号
ウカイビル3F
TEL (0749) 27-3544
FAX (0749) 27-3554

# 竹ヶ鼻廃寺遺跡の匙

編集委員（考古）・滋賀県立大学助教授
高橋美久二

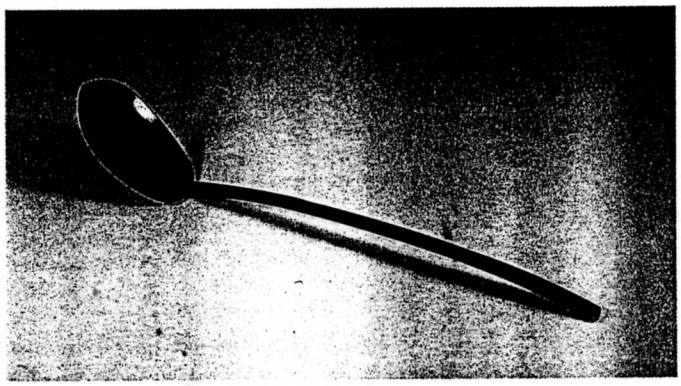
南彦根駅の西南に所在する竹ヶ鼻廃寺では、一九九五年から一九九六年にかけて行われた発掘調査によって、彦根の古代を考えるうえで、貴重な遺構や遺物がみつかりました。

竹ヶ鼻廃寺は、過去に採集された遺物などによって、白鳳時代（七世紀後半）に創建された犬上郡最古の寺院で、郡を代表する古代寺院であると考えられていました。しかし、その中枢部の**伽藍配置は、明らかではありません。**今回みつかった建物群や井戸などは、郡を代表する寺院と並立して建立されることの多い古代の郡役所（郡家、郡衙）の遺構であると考えられます。

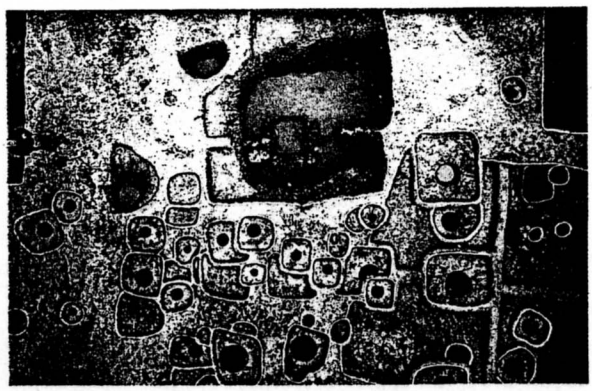
その根拠は、その立地や地名、遺構や遺物などです。竹ヶ鼻廃寺は犬上郡の中心に位置し、当時の幹線道である東山道の近くにあります。また、竹ヶ鼻廃寺付近には、近世の史料に「恒河寺」があったとあります。郡家は「ぐうけ」と呼ばれていましたが、この恒河（ごうが）は、郡家が変化してできた地名と考えられます。今回みつかった建物群は、寺院の建物に多い礎石式とは異なって、すべて掘立柱式の建物で、官衙に多い規模の大きい長殿や倉庫風の建物が、柱筋を揃えるなど規則的に並んでいます。また、付近から役人の身分を示す石帯（バンドにつける**階級章）が出土するなど、官衙的な遺物**がみつかっています。

また、この調査では興味深い遺物として、銅製のスプーン（匙）がみつかりました。現在の日本の食文化には、匙はなじみが少なく、汁ものでさえ箸を使って食します。ところが、古代以来多くの影響を受けたとなりの朝鮮半島では、現在でも箸と匙はセットで食卓に出されます。ただその匙は、汁ものと穀類をすくうものとは同じですが、古代には、日本の正倉院に残る匙も、朝鮮半島や中国大陸で出土する匙も、汁ものをすくうものと穀類をすくうものとの二種類がありました。前者は現**在のスプーンと同じように丸い形をし**て、中央が凹んでいて「勺」とよばれ、後者は形が細長く木の葉の先のように先端がとがっていて平坦で「匕」とよばれています。天平十九年（七四七）の『大安寺資財帳』では、それぞれ「窪匕」と「木葉匕」と表現されています。竹ヶ鼻で出土したものは、後者の匕にあたります。いずれにしても、先進文化の香りのする遺物でした。

当時の郡司（郡役所の役人）は在地の古代豪族が任命されますが、犬上郡の郡司には犬上氏が任命されていたと考えられます。犬上氏には第一回の遣唐使になった犬上御田鍬が出るなど、渡来文化を積極的に吸収した氏族でした。まさに犬上氏にふさわしい文物といえます。



匙



匙が出土した井戸

市史編さんだより 1997年2月15日
「竹ヶ鼻廃寺遺跡の匙」高橋美久二

夕刊 産経新聞 平成9年(1997年)4月1日 火曜日

# 文化！

# 解明進む「古代の道路」

## 直線の大規模道路を次々検出

高橋 美久二

最近、古代の道路の遺構が大規模に発掘される例が増えている。つい先日は栃木県宇都宮市南郊の杉村遺跡から、奈良時代の平城京と蝦夷地（東北地方）を結んだ幹線道路・東山道の跡が全長四百六十メートルにもわたって見つかった。幅は十二メートル以上もある直線の道路である。

私も実際に現地を訪れ、古代の旅人気分を体感してみた。都を離れること約五百キロの陸奥の地。果てしなく延びる道路の壮観さは、まさに律令国家の威信をほうふつとさせるようだった。

### イメージが一新

宇都宮市を訪ねたのは、もうひとつ目的があった。市の東北郊外に残る「将軍道」の踏査である。この道は、八幡太郎こと源義家が「前九年の役」の際に通ったとの伝承を持ち、現在は幅一一三メートルの山道となっているが、起伏の多い山や谷を越え約八キロにわたって直線的に続いている。狭い山道も、よく見ると切り土や盛り土をしながら、幅六―八メートルの人工的な道路として造成した跡が残っていることが観察された。

かつて古代の道路といえば、未発達な曲折の多い細い道と考えられていたのが、イメージは一新された。発掘現場を訪ねるたび、規模の大きさ、一直線に延びる優れた計画性に目を見張らせられるのである。

古代の道路遺構が調査された代表的な例としては、まず一九九四年の静岡市曲金遺跡を挙げねばならないだろう。幅十二―十三メートルの古代の東海道跡で、総延長は三百五十メートル。側溝からは「常陸国鹿島郡……」と書かれた木簡も見つかり、東海道の東端の常陸国（茨城県）から都に運ぶ品に付けられた札と考えられた。

また九五年には、東京都国分寺市の武蔵国分寺跡西北地区で、幅十二メートルの古代の東山道武蔵路跡が三百四十メートルにわたって発掘調査された。保存状況もきわめて良好で、人馬の往来によって硬くなった当時の路面まで残っていた。

### 寺院跡でなく駅家

しかし、このような古代の道路の調査が行われるようになったのは、ごく近年のことである。わたしが古代の交通道跡に興味を抱き、研究を始めた六〇年代の終わりころには、今日の成果は想像もつかなかった。

都から全国津々浦々に連なる道路網があったことは、平安時代の『延喜式』に諸国の駅家の名前が列挙されていることでわかる。古代の道路を復原するには、まずこの駅家の位置を推定し、つないでいく方法がとられるのである。しかし、かつては駅家の遺跡は規模も小さく、確認できないだろうとあきらめ半分でとらえられていた。

駅家の遺跡の追究は、山陽道でスタートした。山陽道では、蕃客（外国の客）に備えて瓦葺きの駅家があったことから、従来寺院跡と考えられていた奈良時代の古瓦が出土する遺跡を再検討し、駅家跡と推定できるものを抽出した。こうした考古学的に駅家跡を確認していく方法は、播磨国布勢駅家跡と確定した兵庫県龍野市小犬丸遺跡などの発掘成果によって実証されている。

いっぽう、歴史地理学的な研究によって、考古学的に判明した駅家と駅家を直線的につなぐ部分で、古道の存在が明らかにされていった。

丘陵や台地上では、空中写真の判読などによって、畦道や細長い窪地状のたんぼになったりしながら直線的に続き、現在でも大字や小字の境になっていることがわかった。また、条里制の痕跡がよく残っている平野部では、条里の痕跡を大縮尺の地図で計測すると、通常の条里の一町分の大きさ（約百九メートル）より、約二十メートル長い部分が直線的に並ぶことが判明し、これが古代の道路跡と考えられた。

### 現在に近い工法も

考古学的成果と歴史地理学的成果とが補強しあう山陽道の研究の方法は全国に拡げられ、各地で直線道路の痕跡が発見され、発掘調査も実施されるようになった。その結果、道路の規模や構造が明らかになってきたのである。

古代道路の造成が丘陵端部や台地部では切り通しをつくり、谷状の低地部では築堤を行っていること。また、丘陵腹部では山側を切り土、谷側では盛り土を行うなど、現在の道路造成に近い工法を行っていることもわかってきた。さらに、鳥取県米子市の陰田第6遺跡で見つかった山陰道の支路跡のように、道路面に小石などを叩き込んで舗装までされていた例もあった。

古代において、幹線道路の建設と維持管理は国家の最も重要な事業のひとつだった。その具体像を明らかにすることは、とりもなおさず、律令国家がめざした地方支配の実体を解き明かすことにつながるのである。

たかはし・よしくに
滋賀県立大学人間文化学部助教授。歴史地理学・考古学。昭和19年、広島県生まれ。京都府立山城郷土資料館館長補佐などを経て現職。著書に『古代交通の考古地理』『京都考古学散歩』など。

産経新聞 1997年4月1日
「文化 解明進む「古代の道路」」高橋美久二

文化

# 中山修一氏を悼む

高橋　美久二

## ひたすら長岡京とともに

長岡京の調査と研究、そして保存に生涯をかけて執念を燃やし続けられた中山修一先生が、四月三十日に逝去された。心からごめい福をお祈りしたい。

私は先生と同じ大学、同じ専攻の後輩にあたり、歴史地理学をやって、その後に長岡京の発掘調査に情熱を注いだという同じ宿縁と、長男忠彦氏と同い年であることなどから、目をかけていただいていた。

それだけに、突然の悲報を聞いて慈父を失った悲嘆にくれた。すぐに中山家を訪ねると、いつもの温顔で先生が玄関に立って迎えられるような錯覚に陥った。奥様にうかがうと、「昨晩まで人の葬儀の段取りをして、今日はそれに出席するつもりでいた」とのことであった。まことにあっけない最期であった。

あるいは、いつも他人にやさしい気遣いをされていた先生らしい大往生であったかもしれない、と思いなおした。一九九三年十一月に心筋こうそくで一月間入院されて以来、その回復後も最も楽しみにされていた長岡京の発掘調査の現場めぐりや、調査担当者の集まりにも、ほとんど来られなくなっていた。人に迷惑をかけたくないという配慮からであったという。

先生は、長岡京内にある乙訓郡神足村大字勝龍寺小字中山（現在の長岡京市久貝三丁目）で一九一五年に生まれられた。

京都大学文学部で人文地理学を専攻されていた四七年に、転居した長岡京市開田付近の水田の区画が、条里の地割りでなく、都の条坊の地割りであることに気づかれた。五三年になって、史料に長岡京廃都後に運池にされた、とある水田をみつけて、長岡京全体の復元図を作成された。

その復元図によって、都の中軸線上にある宮殿の中枢建物である朝堂院の中門（会昌門）、北門、小安殿、大極殿などをつぎつぎに発掘調査してつきとめられた。こうして、長岡京は「まぼろしの都」から現実の都になっていった。

先生の功績は、この長岡京の解明だけでなく、存在感の薄かった長岡京の存在を世間に広く知らせるために、大きな力を注がれたことであろう。

たとえば、先生が執筆された四百件にものぼる。その執筆範囲は、学術関係誌はもちろん、各種新聞、市町村の広報誌、公民館報、青友会誌、会社報などきわめて多彩なものがある。

その中には長岡京究明の学術的なものが多いが、もっと多いのが長岡京とその時代について、やさしく興味深く解説した記事である。それをみると、長岡京を一人でも多くの人に知ってもらおうと努められていたことがよくわかる。

また、先生は長岡京の講演や案内の依頼があれば、労をいとわず、むしろ積極的にかってでられた。その姿勢はどんな人に対しても、懇切丁寧で決して手を抜かずに話された。その話し方は、専門家でない一般の人や児童にも、実にやさしく、わかりやすい説明を心掛けられた。このほかにも、長岡京を教科書に載せる運動など、地道な努力をひたすら続けられ、ようやく長岡京の名が知られるようになった。

先生は、一昨年九月に京都新聞紙上に「たどり来し道」という自叙伝を三十二回にわたって連載された。その連載の最初と最後に長岡京の調査研究の今後について述べ、二度も「もう一度頑張りたい」と書かれていた。そこには、先生の無念さが込められているが、あるいは、これは私たち後進への遺言であったのであろうと、今は思っている。

（滋賀県立大学助教授）

ありし日の中山修一氏
（自宅の庭で1995年9月）

京都新聞 1997年5月5日
「中山修一氏を悼む」高橋美久二

# しがキャンパス通信

## 考古学使い古代道研究

### 駅結ぶ道幅十数メートル

### 律令国家、威信示す

滋賀県立大助教授　高橋美久二さん

―二年前に「古代交通の考古地理」という本を出版されましたね。

「古代交通は大学時代、卒論で扱って以来のテーマで、律令時代の道路を明らかにしたいと、本にまとめました。日本は七〇一年制定の大宝律令で古代中央集権国家の骨組みを定めた。ただ、これまでの文献研究では、古代国家の体裁を整えるため中国の模倣をし、そのまま文章化しただけで、それほど各地に浸透していないだろうと。

古代の道路は、けもの道に毛の生えた程度の踏み分け道で、地形に沿って曲がりくねっていて、遺跡として見つかるはずがないというのが一般的な考えでした。しかし、研究が進むと、実際は幅員十数㍍、ひたすら直線を目指して造られていることが分かりました」

―考古地理とはどんなことを。

「私は人文地理もやっていたので、道路の研究に考古学の成果を活用しようと。古代の道路は三十里ごとに駅(うまや)があった。駅は本来、線路でなく道につくもの。古代人は馬を乗り継いで行ったので、馬がくたびれた時のために、今の十六㌔間隔で駅をつくったわけです。この駅を考古学の成果を使って見つけられないかと」

―どんな方法で。

「私の出身地の山陽道の駅は、太宰府から都へ行く外国の客に備えて国家の威信を保つため、かわらぶき、白壁づくりの駅にしたと文献に書いてある。だから、かわらの出る遺跡を調べたらいいと。これまではかわらが出たらすべて寺院跡と報告されていた。七世紀代の白鳳時代までは確かに寺院跡ですが、八世紀代に新たに豪族が寺を造ることは文献を見てもない。

だから、山陽道沿いに一定の間隔で並ぶ遺跡はかわらぶきの駅と分かる。かわらの分析から、駅の発見につなげたわけです。他に駅や馬に関係する地名や、外国客の接待に都合のよい見晴らしのよい立地、近くに駅の勤務者の住む集落がある遺跡も駅だと。駅と駅が見つかると、それを結ぶ道路が見つかってきます」

―一番初めに駅に違いないと考えた遺跡は。

「加古川市の古大内遺跡です。これも寺院と考えられていましたが、賀古駅跡と推定しました。駅の近くに駅池という地名、賀古駅の北に住んでいた僧教信の教信寺という寺もあって駅に違いないと。兵庫県竜野市の小犬丸遺跡も、もとは廃寺跡と呼ばれていたが、駅跡と推定した。その後発掘したら、駅と書いた土器や『布勢駅』と書いた木簡が見つかり、駅だと実証されました。

駅と駅を結ぶ直線の道路の痕跡も分かってきました。駅と駅を結ぶ道路を見つける方法は、平野部では縮尺二五〇〇分の一の地図で復元すれば、道路を基準線にして地域の農村計画、条里が施工されたことが分かりました。台地では空中写真や現地に残る直線の地割りから分かる。これで発掘しなくても駅と道路を見つける方法が開発され、全国に応用されていった。あちこちで幅十数㍍の古代道路が見つかりました」

―律令国家は中国をまねただけではなかったと。

「全国津々浦々まで行き届くシステムがつくられていて、広い直線道を造ることで律令国家の威信を地方の人々に見せつける効果が大きかったのでは」

―現在の関心は。

「『延喜式』にのっていない奈良時代の道が最近いくつか見つかり、現在の主要道路の骨格がすでに律令時代から造られていたことが分かってきました。大枠の道路網は大体検討がついたので、今後は地方の道路網がどの程度できていて、律令国家がどういう国家を目指していたのかまで研究が進められたらと思っています」

「律令国家はその威信を全国津々浦々にまでみせつけるために直線の道路網を整備したのでは」と語る高橋助教授

**たかはし・よしくに**　一九四四年、広島県生まれ。京都大文学部史学科卒。京都府教委文化財保護課技師、同府立山城郷土資料館館長補佐、同府埋蔵文化財調査研究センター調査第一課長をへて、九五年から滋賀県立大人間文化学部助教授。専門は考古学、歴史地理学。著書に「古代交通の考古地理」、共著に「京都考古学散歩」「よみがえる長岡京」「発掘が語る日本史」などがある。

学問のすすめ

京都新聞 1998年8月22日
「しがキャンパス通信」

地域総合ニュース

よし笛

高橋 美久二

# 中国湖南省の遺跡見学

私は昨年の暮れに、滋賀県と友好関係にある中国湖南省の遺跡見学の機会に恵まれた。わずか二週間の旅で、しかも中国語会話がほとんどできない私の一人旅であったため、中国側とのコミュニケーションが十分にとれたわけではないが、筆談と身振り手振りと中国人の親切に助けられて、所期の目的を達することができた。さらに、最近の中国の文化財事情についても、じかに触れることによっていろんなことを知ることができた。

私の今回の旅の目的は、漢代の二つの有力な国の王墓と王城の比較研究であった。二つの国の一つが、湖南省の省都である長沙に王城があった長沙国であり、もう一つが江蘇省の地方都市徐州に王城があった楚国（後漢代には彭城国）である。二つの国とも漢帝国の皇帝の劉氏の一族が王に封じられた国で、その王墓の構造はそれぞれまったく異なっていたが、その規模はいずれ劣らぬ壮大さであった。

長沙国の王墓は、巨大な木を角材に加工したものを、数千本積み上げて巨大な部屋をつくる構造の墓であるのに対して、楚国の王墓は石灰岩の山腹に横から穴を掘って、巨大な墓室を多数つくるもので、どちらもその権力の大きさを実感させるには十分な迫力をもつものであった。長沙の漢代の墓としては、馬王堆漢墓が世界的に有名であるが、これは王に仕える大臣クラスの墓であって、王墓はさらに壮大なものであった。

歴代の王墓は、いずれも王城の周辺の小高い山に、あたかも生前の居城を見守るかのようにつくられている。その王城の具体的な位置は、どちらも市街化が進んでいて、確定することはできなかった。ただ、長沙の王城は、市街化した長沙の町を丹念に踏査することと、過去の発掘調査の成果を地図上に落とすことによって、大体の感触を得ることができた。それは、二十世紀はじめまでは残っていた明清時代の城壁の内側に、唐代の城壁、さらにその内側に漢代の城壁が約一キロメートル四方に想定されそうなことが分かってきた。

今回の長沙での調査のもうひとつの目的は、平和堂長沙支店から出土した十七万点におよぶ三国時代の木簡の出土の位置を確かめることでもあった。それは、日本に入ってくるニュースでは、木簡出土の具体的な状況がよく分からなかったからであった。木簡は、漢代の王城の北側中央のやや東寄りにあった井戸から出土したことを確かめることができた。漢代の長沙国の政治の中枢が、三国時代にも引き継がれていたことも分かったが、三国時代の井戸以外の遺構は、まったく調査できていないことも分かった。そこに、日本と異なる中国の文化財行政の困難な現状を見ることとなった。それは、各地で聞いた「メイヨウチェン（金が無い）」で、観光資源に結びつかない文化財行政にまわす金は無いという現実であった。

（県立大助教授）

「金亀児童公園の低い石垣（彦根市）」 石原 誠治

京都新聞 1999年2月12日
「よし笛 中国湖南省の遺跡見学」高橋美久二



地域総合ニュース

よし笛

高橋 美久二

# 博物館と独立行政法人

行政改革の一環として、国立の博物館などが独立行政法人になるという。独立行政法人化については、数年前から話題となっていたが、日程もいよいよ具体的になってきたようで、二〇〇一年一月の中央省庁の再編に合わせて、同年四月に八十四の機関が独立行政法人化するということである。その八十四の機関の中に、国立の博物館・美術館、文化財研究所などが入っている。

独立行政法人という耳慣れない言葉の意味も、その内容もまだよく理解できないが、「独立行政法人」をキーワードに検索してみると、千四十三件もあった。その多くの議論が、大学の独立行政法人化に対してのものであったが、博物館・美術館の独立行政法人化についても少なくなかった。その議論の中では、教育とか文化など、スパンの長いスケールでその成果を測るべきものを、効率化ということでその効果を性急に求めるべきではない、というものが多かった。

とくに、独立行政法人化は、一九八八年にイギリスのサッチャー元首相が行った行政サービス部門の「エージェンシー化」が手本になっているが、博物館や美術館の独立行政法人化は、そのサッチャーでさえ手をつけなかったというのに、日本がそれをやれば、天下の愚策として笑いぐさになるだろうという意見が印象的であった。

独立行政法人化でもっとも怖いのは、国の機関から地方の行政機関まで波及したときである。博物館は、もともと図書館と並んで重要な社会教育施設として、社会教育法で位置づけられている。ところが、公立図書館の入館料が無料で、その蔵書の増加数、司書の数、施設の規模が、法や規則によって明確に位置づけられているのに対して、公立博物館はその位置づけはきわめてあいまいである。

滋賀県内にも立派な建物の公立の博物館・資料館が、景気の良い時期に多く建てられた。その中の学芸員は少ない人数の中で、所蔵品の数を増やし、地元に根づいた多彩な展示や普及活動を展開している。にもかかわらず、入館者数の減少に悩んでいる所が少なくない。

それは、博物館法などの位置づけが弱いために、立派なハードをつくっても、ソフトとなる展示の費用や所蔵品数や学芸員数が少ないからである。そのような存立基盤の弱い公立博物館が独立行政法人化すると、その行き先は目に見えているような気がする。

（県立大助教授）

「琵琶湖文化館」（大津市）
石原 誠治

京都新聞 1999年4月9日
「よし笛 博物館と独立行政法人」高橋美久二

京都新聞
1999年(平成11年)5月21日　金曜日　滋賀 22

地域総合ニュース

よし笛

高橋　美久二

# 渤海の遺跡と日本

五月初旬の十余日間、ロシア沿海州と中国東北部の黒竜江省と吉林省にある古代の渤海国（六九八―九二六）の遺跡を見学する機会に恵まれた。なぜ、わざわざ人の出入りの多いゴールデンウイークにしたかというと、遺跡を見学するには最も適した季節であったからである。まだ、やや肌寒かったが、木々は芽吹く前で、畑のトウモロコシなども植え付けられる前で、広大にひろがる遺跡を見透かして見学するには、絶好の季節であった。咲き誇る杏子の花と畦道のツクシが近畿地方の三月初旬―中旬の季節に相当することを思わせた。

古代の渤海国といわれても、あまりピンと来ないかもしれない。私自身も、近年まであまり渤海国を研究対象としようとしたことはなかった。ところが滋賀県に来て、古代の交通路を調べ、さらに北陸道の近江と越前国境にあった愛発関の調査に加わり、敦賀津と塩津・海津との交通問題を考えていくうちに、次第に渤海に興味をいだくようになった。というのは、当時盛んに交流のあった渤海国の使節が、敦賀から西近江路を経て、京都に入っていたからであった。

渤海国が存続した二百二十八年間のうちに、渤海からの使節は三十五回来日し、日本からの渤海への使節は十五回に及んだ。中国の唐との交流よりはるかに密であったことがわかる。延喜二十（九二〇）年には、渤海使が若狭国に到着し、越前の敦賀にあった迎賓館である松原客館に移り、そこから京に入る途中に、近江国の国司が穴太駅で迎えている。

渤海への旅は、新潟からロシアのウラジオストックに飛び、そこから時計と反対の北回りで中国に入り、ロシアと中国の渤海時代の都、平城、山城、寺院跡、墓、駅跡などを見学しながら、南から再びロシアに入り、ウラジオストックから新潟に帰り着いた。

両国の渤海時代の遺跡の保存状況の良さと、そのスケールの大きさに改めて感激した。もっとも感激したのは、渤海時代の日本への出港基地・東京竜原府の郊外の「日本道」沿いの駅跡と推定されている石頭河子古城、日本への出航の港・ポシェット湾とポシェット湾を望む渤海時代の平城・クラスキノ土城を見学したことであった。

当時、日本から渡った使節が抱いた望郷、渤海からの使節がこれから渡る日本への期待と不安などの思いが伝わって来るような遺跡であった。また、日本への出航の港・ポシェット湾のポシェットが、袋のように湾入の深い天然の良港の地形を示すものであるとわかり、日本側の渤海への出航の港・福良港（石川県羽咋市）のことが思い出された。それは「福良」の字は、もとの「袋」という地名を二字の好字に変えた時に出来た地名あろうと考えられ、日本と渤海の両側の港の名が「袋」であったことに、時空を超えた地名のおもしろさにも感激した。

（滋賀大助教授）

「旧逢坂山トンネルの東口」
（大津市）石原　誠治



京都新聞 1999年5月21日
「よし笛　渤海の遺跡と日本」高橋美久二

京都新聞
1999年(平成11年)7月16日　金曜日　滋賀 26

地域総合ニュース

よし笛

高橋　美久二

# 参加型博物館と県大ミニ博物館

生涯学習時代の博物館は、かつての専門的で難しい博物館ではなく、多くの人々に開かれたものでなければならない、とよくいわれる。そのためには、博物館も積極的に集客のための努力をしなければならない。博物館の専門職である学芸員の資格のための必要単位に、一昨年から博物館情報論と博物館経営論の単位が各一単位増えたのも、そういう時代の要請からであった。博物館経営論では、博物館の目的を達成するための市場調査と分析をおこない、その結果で博物館の事業を企画立案するマーケティングの論理が必要なことも講義することとなっている。

私も前任の資料館では、生涯学習時代にふさわしい資料館づくりを工夫した。いろんな人たちを対象に、体験教室をおこなうなど、参加型の資料館をめざして、いろんな普及活動をおこなってきた。しかし、参加型博物館がこれでよいのか、という自問自答が常にあった。たとえば、小中学生を募って、竪穴式住居をつくり、実際に宿泊体験することもやった。日ごろ体を動かして労働することのない現代っ子には、真夏の炎天下での竪穴式住居づくりは、大変な重労働であった。しかし、参加した子どもたちはみんな、力を合わせて大きなものを作り上げたことの喜びと、身近な材料で家を作り上げるという、昔の人の知恵と工夫を学んだことの感激を語ってくれた。それはそれで、大きな収穫であった。けれども、このような事業は博物館側にとっても大変な負担で、その割に参加人数を絞らなければならなかった。労多くして、効の少ない事業は長続きしない。

私は、今の大学に赴任してきて、博物館学も担当することになった。そこでは、今の日本の博物館の位置づけからみても、しかも現在のような不況では、学芸員の資格をとっても、その職がほとんどないことを述べるのが常になっている。しかし、日ごろあまり博物館に行かない若者も、履歴書に書く資格が欲しいと思うのか、学芸員課程の希望者は多い。将来学芸員にはなれないかもしれないが、博物館のよき理解者を育てることも重要である。そのためには、博物館の事業を、企画立案して実行するのが、もっとも有効ではないかと考えた。そこで、学生の企画による展示を行うこととした。それが、今県立大学の交流センターと多賀町立博物館（多賀の自然と文化の館）でおこなっている「県大ミニ博物館」である。県立大学では、「我流・トミカの歴史」と「幸運の豚」という自分のコレクションに主張をこめたもの、多賀町立博物館では、「夏の思い出展～がきんちょ時代の夏休み～」と「手紙にみる戦中の生活」というすこし昔の過去をふりかえるものである。いずれも、若者らしさのあるユニークな、手作りの展示である。学生たちに、それぞれの評価をしてもらったが、これによって今後博物館に行っても展示の見方が変わってくるようだというのが大きな成果であった。これこそ、参加型の博物館ではないかと考えている。

（県立大助教授）

「近代美術館への道」
石原　誠治

京都新聞 1999年7月16日
「よし笛　参加型博物館と県大ミニ博物館」高橋美久二

地域総合ニュース

よし笛

高橋 美久二

# 近江の街道と方位

京都から滋賀県に赴任してきて、五年目になるが、いまだに慣れぬのが道路やたんぼの畔（あぜ）の方向と方位である。京都や奈良にいると、たんぼの畔や道路の方向は、方位に沿って南北か東西方向にきまっている。だから、いつも自分のいる位置が碁盤目状のどの位置にいるか確認できるし、たとえ道に迷っても、同じ方向に三回折れればもとにもどってこれる。ところが、滋賀県では、たんぼの畔の方向が南北方向ではなくて、傾いていて、多くの道はその方向に走っているが、ときどきそのたんぼの畔の方向と斜めに交差する道もある。だから、三回折れ曲がっても、必ずしももとに戻ってこないし、いまどの方向を向いているのかさえわからなくなってしまうことが多い。しかも、そのたんぼの畔の方向と正南北との振れが、滋賀県内みな同じなら、まだ悩みも少ないが、湖南と湖東と湖北と湖西とでは、それぞれその方向が異なっているから、ますますやっかいである。そのたんぼの畔の方向が、古代の条里制によっているからだと、予備知識ではもっていたが、日常的に道路や畔の方向で東西南北を感知していた身にはなかなか対応できなかった。

ところが、近江の古代の道路を調べていると、その理由がわかってきた。近年の研究によると、古代の主要道路は直線的で、幅広であったことがわかってきた。直線といっても、狭い日本の国土であるから、どこまでも直線というわけにはいかなくて、平野を最短距離で結べるように折れ線グラフの線のような直線で結んでいく。その折れの部分が、大きな川や平野の境である低い峠となることが多く、しかもそこが旧郡境となることが多い。たとえば、湖東平野を縦断する古代の東山道（のちの中山道）でみると、京都から来た道が瀬田川をわたると、大津市と草津市区間（旧栗太郡）では、北で約三五度東に振れて北上し、守山市で旧野洲郡に入ると、北で約六五度東に向きを変えて東北に進み、近江八幡市や安土町の旧蒲生郡区間でもほぼその方向で進み、神崎郡五個荘町に入ると、北で三三度東に振れる角度に向きを変えて北上して、神崎郡・愛智（知）郡・犬上郡を同じ角度の直線で彦根市に達する。彦根からは、山の中の谷あいの道を岐阜県にいたる。基本的には古代の東山道を今の中山道が踏襲しているが、中山道が曲折が多いのに対して、古代の東山道は直線で、しかも十㍍以上の幅広なのが特徴である。

そこで、東山道と条里の関係を調べてみた。すると、条里を大きな縮尺の地図で復元してみると、東山道部分で幅二十㍍弱の道幅分の条里のすき間があることがわかった。これによって、東山道が条里の施行より古く、東山道を基準にして条里制が施行され、きわめて高度な古代の地域整備計画が行われていたことがわかってきた。近江の平野のたんぼの畔や街道の方向の謎（なぞ）が解けた。謎はとけて、ようやく頭で納得することができたが、身体の方はまだついていけていない。

（県立大助教授）

「雪野山の広場」（八日市市）石原誠治

京都新聞 1999年11月19日
「よし笛　近江の街道と方位」高橋美久二



地域総合ニュース

よし笛

高橋 美久二

# 古代の北陸道と愛発関

古代には七道制とよばれて、全国各地にむかう七つの主要な道があった。この七道のうち、西海道を除く六道が都を起点としていて、山陰道、山陽道、南海道が都から西の国々にむかう道で、東海道、東山道、北陸道が東の国々にむかう道であった。近江国は、東国にむかうすべての道が通るところで、「（近江国は）国境が五畿に接し、駅は三道を承け、奸猾の輩の往還が絶えず」（天暦三年（九四九）の近江国司解）と表現され、近江国司が中央政府に愚痴をのべる口実のひとつともなっていた。

この近江国から東国にむかい国境を越えたところにもうけられていた関所が、古代の三関（さんげん）とよばれ、もっとも重要視されていた。三関は、東海道沿いの関が伊勢国の鈴鹿関、東山道が美濃国の不破関、北陸道が越前国の愛発関である。かつては、この三関は七世紀末の大津京の時代に、近江国を東国の賊から防御するためにもうけられたと考えられていた。ところが関の位置をみると、それぞれが関を防御する国の役所（国府）よりも都側にあって、東国からの賊を防ぐ機能がないこと、また発掘調査であきらかになった不破関の構造でみると、都側の防御に重点が置かれていることなどがわかった。三関には、都で異変が起こったときに、都から東国に逃れる賊を防ぐ機能があったと考えられるようになってきた。また、その年代も不破関の調査成果によって、大津京の時代よりも後の奈良時代になってつくられたこともわかってきた。

不破関や鈴鹿関の位置や構造は次第に明らかにされてきたのに、愛発関はその位置さえ明らかになっていない。わたしは、この数年敦賀市教育委員会の要請によって愛発関調査委員会に加わり、愛発関の調査にかかわることとなった。今夏も炎天下十日間の試掘調査をおこなってきたが、愛発関の位置を明らかにする成果は出なかった。わたしたちは、近江と越前をむすぶ古代の北陸道を、高島郡マキノ町と敦賀市疋田間の現在の国道161号（七里半街道）沿いと考えて、愛発関はこの道路沿いにあるとして調査を進めている。ところが、愛発駅が存在していた奈良時代の北陸道は、七里半街道沿いではなかったという異説が近年になって出されてきた。そのひとつは若狭街道（九里半街道）でいったん若狭国に出て、そこから若狭湾沿いを越前国にむかうという説で、もうひとつはマキノ町白谷から敦賀市雨谷にでる急峻な山道（白谷越え道）を越える説である。それぞれの説による愛発関の位置は、敦賀市側にでた平野部に想定するもので、前者の説では敦賀市関峠付近、後者の説では敦賀市雨谷付近に考えられている。それぞれに魅力のある新説であるが、若狭回りの説ではあまりにも遠回りで、白谷越え道説では山道が険しすぎて、いずれも古代の官道としてはふさわしくない。また、そこには「アラチ関」を示す地名が残っていないのに対して、七里半街道沿いでは近江側に「小荒路」、越前側に「愛発山」「嵐山」などの地名、「有乳山」という寺の山号、明治以降の「愛発村」「愛発小学校」など、数多くの「アラチ」地名が残っている。新説は注目を集めやすいが、オーソドックスな旧説も決して捨てがたいのである。旧説にこだわって、愛発関跡を求める所以である。

（県立大助教授）

「瀬田川の箱舟」
石原　誠治



京都新聞 1999年9月24日
「よし笛　古代の北陸道と愛発関」高橋美久二

地域フィド京都

社会報道部
(075) 241-6119
FAX (075) 252-5454

デミオ・プレマシー・MPV
マツダアンフィニ京都
(本社)南区吉祥院向田西町1 ☎075(315)1111

# 古の伝言 ——91

## 今里車塚古墳

長岡京市今里四丁目、今里庄ノ渕

# 常識覆した木製埴輪

古墳で見つかる円盤状の笠型木製品は、何のためのものなのか―。かねてからの論議を大きく動かしたのが、今里車塚古墳の十カ所の柱穴と木の柱根だった。

調査は府道整備に伴い、一九七九年二月に始まった。長岡京遺跡の西二坊大路にあたる場所だった。

大路跡は途切れていた。代わりにこぶし大の石がたくさん出てきた。続いて埴輪に泥土。丘は削られていたが、古墳の堀と墳丘の一部であることが分かった。

掘り下げると、墳丘のすそには三十㌢以上の根石と葺石が並んでいた。外側には柱穴と柱根が見事に四㍍間隔で並んでいた。

「正確に割り付けられていたので当初、葺石を葺く測量ぐいかと思った」。当時、京都府教育委員会の埋蔵文化財担当技師だった高橋美久二・滋賀県立大教授は苦笑する。その後、直径五十五㌢の笠型木製品も出土。「九州では石の笠と柱がセットで出土する。木製埴輪に違いないと確信した」

柱は直径二十㌢の大柱と十㌢の小柱が交互に並び、大柱は大木を四つ割にして作られていた。小柱とともに板材も見つかり、飾り物が違うことも確認された。

研究者の中には「木は腐りやすい。臨時的なもの」とする意見もあった。しかし、高橋教授は「土の埴輪は雨にあたると粉々になる。風化に強いコウヤマキをわざわざ選び、加工もしている」と土と木の埴輪が墳丘を飾るさまを描いた。

それが裏付けられたのは、八八年二月。奈良県橿原市の四条古墳と天理市の小墓古墳で木の埴輪が大量に出土したときだ。今では教科書にも、土と木の埴輪で飾られた図が紹介される。

「埴輪は『形代』。木に近い物は木で、土に近い物は土で作ったのでしょう。布旗もはためき、彩り豊かな古墳は遠くからでも目を引いたのでは」。高橋教授は古代人の葬送の姿に、思いをはせる。

(洛西総局 栗山圭子)

古墳を取り巻く柱が出土した今里車塚古墳。埴輪のイメージが一新された(長岡京市今里、1979年11月)

京都の遺跡めぐり

# 宮都のロマン

## 長岡京発掘50周年

≫2≪

## 京域「調査の大切さ痛感」

滋賀県立大教授

高橋 美久二さん

―長岡京の発掘調査に行政が乗り出すまで少し時間がかかりましたね。

「京都府が長岡京の発掘調査に乗り出したのは六四年から。それまでは発掘調査への関心は低く、個人や開発業者らが資金提供し、中山修一先生と京都大関係者らが臨時調査団をつくっていた。府教委に埋蔵文化財の担当技師が採用されたのも六一年からで私で二人目。現在、府内の担当者は百数十人に増えたことを考えると隔世の感がある」

―開発優先の時代、長岡京発掘には反発もあったでしょう。

「七四年、府立向陽高の建設を前に京域の調査に手をつけた。人手もなく成果も期待できないのに、京域なんて広大な面積を調査対象にしてどうするのか、の意見もあった。建設工事は高校生の急増対策でもあり、足踏みさせるのかという反発も。しかし、府教委の公共事業なのに、ここで見逃しては後の文化財行政がやりにくくなるとの思いがあった。時期を同じくして、平安京や平城京でも京域の調査が始まり、機運も高まっていた」

―京域調査の成果は。

「木簡や条坊遺構、大量の土器が出土した。特に土器は年代を測る物差しになる。長岡京は十年の都。そこから出土する土器は絶対年代が分かり、考古学的に魅力がある。それまで、おおよそ八―九世紀といっていた出土品も、細かく年代を限定しうる。現場担当者として、京域を掘ることの大切さを痛感した」

―成果を受け、長岡京全域を対象区域とした。

「七六年に府と市町の土木行政担当と文化財担当者を集め、行政指導の必要性を説明した。直後の七七年、向日市鶏冠井町沢ノ東で大量の木簡が出土した。もともと長岡京は平城京に比べ、文献史料がとぼしく、宮域内の調査では得られなかった生々しい情報が分かったのが大収穫だった。さらに、市町に職員を配置し、行政が責任を持って調査するシステムを強化するよう働きかける裏付けとなり、その後のチェック機能の有効化が図れたと思う」

―この五十年で、長岡京は詳細な復元図も描かれるようになった。しかし今後も調査は続く。

「長岡京の層に至るまでに、それ以後の時代を掘り進めていく。また、その下に埋もれている層も合わせて調査しなければならない。長岡京を掘ることは、その前史も後史も含め、密度の濃い調査ができる。このため、この地点には室町時代の遺跡がない、といったことさえ分かる。考古学的には、遺跡や遺物があることを証明するのは簡単だが、ないことを示すのは大変難しい。各時代ごとの集落の具体的様相がつかめることで、将来的には人口密度さえ推測できるだろう。これまでの蓄積で、長岡京は掘る必要もないのでは、といわれることもあるが、前史後史を考えると今後の発掘調査も期待したい」

**たかはし・よしくに**　1967年、京都府教育委員会の埋蔵文化財担当技師として採用。府内各地の発掘調査に携わる。74年以降、乙訓地域の発掘調査を指導。82年、府立山城郷土資料館館長補佐。95年、滋賀県立大助教授。2000年4月から現職。59歳。



京都新聞 2004年1月4日
「宮都のロマン 長岡京発掘50周年 2」

新・史跡でつづる 古代の近江

【第24回】

高橋（たかはし）　美久二（よしくに）（滋賀県立大学）

# 前方後円墳の時代

## 古墳① 荒神山古墳の発見をめぐって

こうじんやま（彦根市）

### 古墳時代の勢力地図描きかえる成果

**◎荒神山と古墳**

彦根市西南郊外の琵琶湖岸にそびえる荒神山は、標高278㍍の独立丘陵です。山の多い近江では決して高い山ではありませんが、湖東の平野からはどこからでも見渡せ、対岸の湖西からもよく見える山です。

荒神山に古墳があることは、古くから知られていましたが、その実体は必ずしも明らかではありませんでした。そこで、彦根市史編纂に伴う調査として、1997年冬に、荒神山の遺跡分布調査を行いました。

その分布調査の方法は、尾根上の道、谷の道を中心に数人毎のグループに分かれて、横列に並んで歩き、調査対象地をくまなく歩いて遺跡の分布状況を確認するものでした。この調査によって、いままで不明であった古墳群など、ある程度具体的につかめるようになりました。

この分布調査前に、荒神山の南中腹にある延寿寺旧蔵品の中に、伝荒神山出土とする車輪石があることを聞いていました。車輪石というのは、古墳時代前期の大型の前方後円墳などに副葬されることの多い、貝輪形の石製品です。車輪石を出土するような大きな前方後円墳が荒神山のどこかにあるはずだという意識のもとに踏査したにもかかわらず、当時は確認できませんでした。

**◎巨大古墳の発見と測量**

2002年になって、荒神山に大きな前方後円墳があることがわかりました。その位置は、荒神山頂上の荒神山神社の北側背後にあり、平野部側ではなく琵琶湖側を見晴らす側にありました。近年の遊歩道工事によって前方部の西南角の一部が削られ、墳輪が出土していて、古墳であることがわかったのです。遺跡分布調査は、くりかえして何度もおこなわなければならないことを痛感しました。

そこで、この古墳の正確な形や大きさを把握するために、早速測量調査を行うこととしました。

掲載した測量図は、同年の3月から4月にかけて、滋賀県立大学の学生等が参加して測量したものです。この測量調査によって、荒神山古墳は、全長114㍍もある巨大な前方後円墳であることが判明しました。この大きさは、安土町の安土瓢箪山（ひょうたんやま）古墳の全長134㍍、大津市の膳所茶臼山古墳の全長120㍍に次ぐ、滋賀県下第3位の規模となります。

また、この古墳は、埴輪・葺石（ふきいし）・段築（だんちく）という古墳の外部施設の3要素をすべて備えているという、きわめて典型的で整った形の古墳であることもわかりました。

古墳の埋葬施設については、現状ではよくわかりませんが、後円部の墳頂部に東西方向の大きな既掘穴（きくつあな）があります。竪穴式石室の石材などがないことから、木棺を粘土で覆う型式の粘土槨（ねんどかく）といわれる内部施設があったかと推定されます。出土品についてもよくわかりませんが、前に述べた車輪石がこの古墳から出土した可能性があります。

**◎葺（ふもと）の巨大古墳**

ところで、丘陵上の前期古墳の荒神山古墳が確認されてから、注目されたのが荒神山の南麓にある塚村古墳です。明治初年の地籍図には塚村集落が馬蹄形の地割となり、その周囲に水路がめぐり、一段低い細長い帯状の水田が一定幅をもって周囲を取り囲んで表現されていることから、前方後円墳の墳丘が削平されたものと考えられます。その形から、盾形周濠をもつ中期（5世紀）の大型前方後円墳となります。これを復原すると、墳丘全長約105㍍、周濠を含めた全長は約158㍍になり、荒神山古墳の次の世代の首長墓にふさわしい規模が復原されることになります。

**◎荒神山古墳の意義**

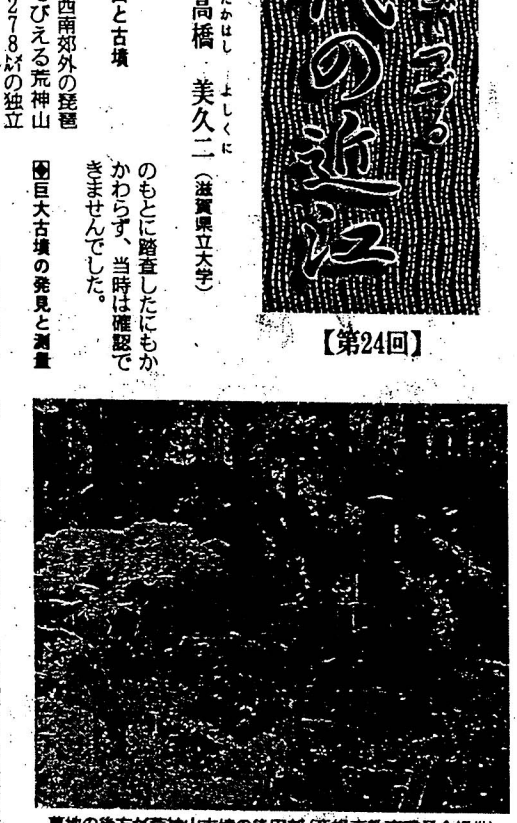
荒神山古墳は、山頂という立地や古墳の形、埴輪などからその築造年代は古墳時代前期（4世紀）と考えられます。この古墳には、古墳の外部施設の3要素がすべて備えられ、定型化した畿内的な古墳であることもわかります。荒神山古墳と塚村古墳の出現により、近江の古墳の首長墓系譜の中で、湖東平野の首長墓の系譜が最も強大な勢力であったことが想定されるようになり、近江の古墳時代の勢力地図を描きかえることになりました。

荒神山古墳の立地

『日は人作り、夜は神作る ― 前方後円墳の出現と展開』（県立安土城考古博物館、2004年）から

荒神山古墳測量図

「『新修彦根市史』編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書」（2004年、彦根市史考古部会）から



墓地の後方が荒神山古墳の後円部（彦根市教育委員会提供）

【監修】小笠原好彦（滋賀大学）／大橋信弥（安土城考古博物館）



滋賀民報 2004年6月20日
「新・史跡でつづる　古代の近江　第24回」高橋美久二